



全国がんばる林業高校生表彰

「全国がんばる林業高校生表彰」は、将来の森林・林業を担う人材として、日々森林・林業に関する社会活動や研究などに取り組んでいる高校生の取組を応援するため、全国林業研究グループ連絡協議会が林野庁補助事業を活用し、令和2年度から開催しています。

本表彰には、高校生個人の資格取得や社会活動への参画状況を評価する「学校推薦部門」と、グループ等で地域の森林・林業の振興や課題解決を目指し取り組んでいる意欲的な活動や研究を評価する「地域活動・研究部門」の2部門があります。

「令和6年度全国がんばる林業高校生表彰」において、「学校推薦部門」では熊本県立南稜高等学校の原口煌人さんが、「地域活動・研究部門」では群馬県立利根実業高等学校の森林科学部（代表：萩原来人さん、小林歩輝さん、靱山絆さん）がそれぞれ最優秀賞である林野庁長官賞を受賞しました。

原口さんは復興支援のボランティア活動をきっかけに、コミュニケーション能力を実践の中で身につけながら、木製カメラを活用した地域の子どもたちへの木育活動等様々な取組をしており、将来の目標を定めて行動していることが評価されました。群馬県立利根実業高等学校の森林科学部は地域の課題である放置竹林を解決しようという取組であり、課題解決への過程も自らが考えてアイデアを出し、ステップバイステップで前に進み、確実な成果を上げていることが評価されました。



学校推薦部門

熊本県立南稜高等学校 はらぐちらいと 原口煌人さん(2年生)

活動内容: 木育活動、「令和2年7月豪雨」災害復興への取組等

取得資格: 木育インストラクター上級等

受賞歴: 第26回高校生小論文コンクール最優秀賞受賞等



青山林野庁長官、原口さん



地域活動・研究部門

群馬県立利根実業高等学校 **森林科学部**

代表 はぎわらいと 萩原来人さん(3年生)

こばやしあゆき 小林歩輝さん(3年生)

ちみやまはん 靱山絆さん(2年生)

テーマ: 放置竹林の夢～無価値からの挑戦～

活動内容: 放置竹林の整備、薪や竹炭づくり、竹を活用したイベント実施、タケノコや幼竹の収穫・販売等



森林科学部の皆さん
(前列左から3番目 靱山さん、5番目 萩原さん、6番目 小林さん)



「木と共に、巡る未来」の実現に向けて

株式会社大林組



協定締結の検討経緯

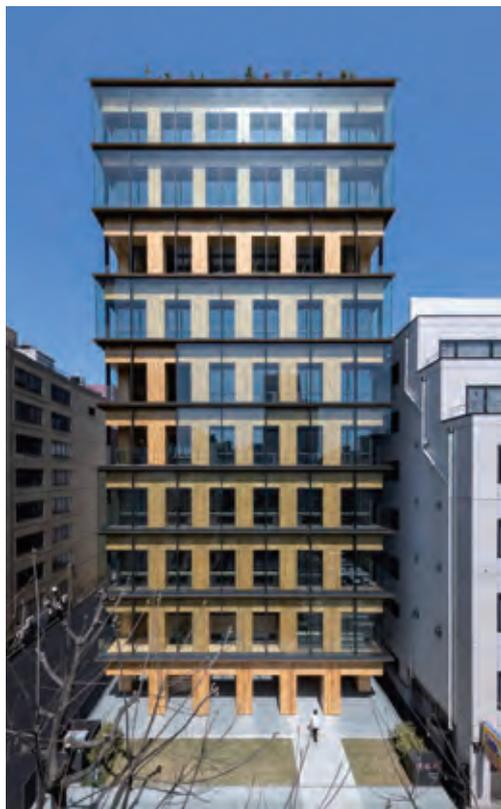
大林組は多くの伝統木造建築の改修等の実績に加え、2010年代初めから現代工法による中大規模木造建築の設計施工実績を積み、2017年には「森とともに生きる木造循環型都市『LOOP50』」*建設構想を発表しています。



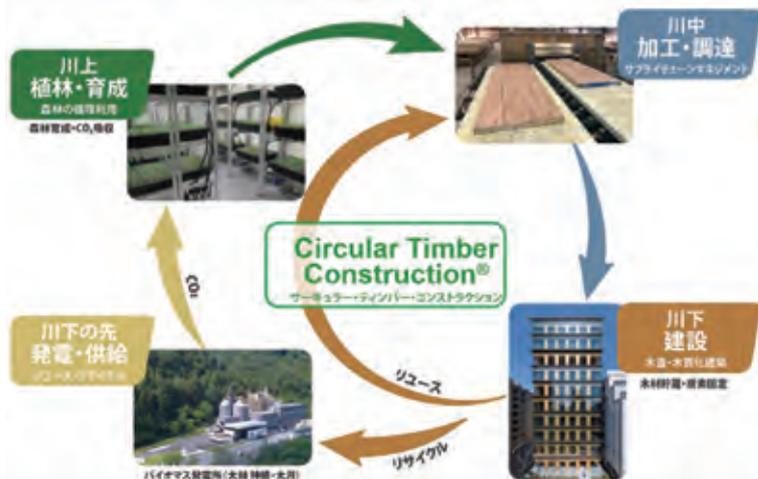
LOOP50 ※「LOOP50」とは、持続可能性と魅力ある暮らしを両立する中山間地域の街を構想した木造循環型都市。

また、2022年には日本初の高層純木造耐火建築物として『Port Plus』（神奈川県横浜市）を竣工させました。竣工に当たって約2,000㎡の木材を使用する経験の中で、サプライチェーンを活性化させる必要性を感じ、川上では苗木の人工光育成技術の開発と実践、川中では木材加工の株式会社内外テクノス（埼玉県ふじみ野市）との協業に加え、CLTメーカーの株式会社サイプレス・スナダヤ（愛媛県西条市）のグループ化、川下の先ではサーマルリサイクル（バイオマス発電）に取り組ん

でいます。この活動をCircular Timber Constructionと名付け、木材のサプライチェーンへの貢献を通じて木材利用促進を図っています。その後、建築物木材利用促進協定の制度を知り、当社の活動と合致することから、2023年2月に農林水産省、経済産業省、環境省と、当社グループ3社の合同で協定を締結するに至りました。



Port Plus



協定に基づく構想の概要

協定では、「中高層木造・木質化建築等の促進を通じた、森林共生都市の実現及び循環型森林利用の推進」を掲げ、次の8つの取組を行います。





大阪・関西万博の大屋根リング 提供：公益社団法人2025年日本国際博覧会協会、株式会社大林組、株式会社伸和

- ① 建設事業者として事業主に木造・木質化に関する情報提供
- ② 建築事業主としての木材の積極的な活用
- ③ 森林所有者として「伐って・使って・植えて・育てる」森林循環利用
- ④ 耐火性・耐久性・再利用などの技術開発、人工光苗木生産技術の開発
- ⑤ LOOP50の理念に基づきまじづく・地域創生



岩谷産業神戸研修所 提供：ヴィブラフォト 浅田美浩



nonowa国立SOUTH 撮影者：Nacasa&Partners Inc.

- ⑥ 施工時における合法木材の利用
- ⑦ 自社設計物件におけるZEBの推進
- ⑧ 再生可能エネルギーの適切な組み合わせ利用

協定に基づく取組

今回の協定締結以降、2024年末までの実績で、見学者数はPORT PLUSだけで2,086名、講演会を14回、展示会を7回行いました。耐火の認定を14件取得し、実物件に活かす予定は、LOOP50については、理念に賛同いただいている自治体と協議を継続しています。



(仮称)天神1-7計画

国内では「(仮称)天神1-7計画」(福岡福岡市)に着工し、設計者とともに外部で使用されるCLTの耐久性を高める工夫の検討を行っています。海外では、木造ハイブリッド構造ビル(高さ182m)の「アトリアン・セントラル」(オーストラリアシドニー)の工事に着手しており、

今後の抱負

11月には290本を初出荷し、当社職員も参画して苗木の植林を行いました。この活動や当社グループ所有林における循環型の森林施業等が評価され、「森林×ACCTチャレンジ2024」の優秀賞(林野庁長官賞)を受賞しています。協定締結後に竣工した木造物件は計7件で、木材を計2,705m³使用しています。直近で竣工したものは「nonowa国立SOUTH」(東京都国立市)、「岩谷産業神戸研修所」(兵庫県神戸市)などがあり、大阪・関西万博の大屋根リングも間もなくお披露目されます。



アトリアン・セントラル

2026年に竣工する予定です。これらの物件を通じて新たな技術開発に挑戦し、木材利用促進に貢献することで、森林共生都市の実現および循環型森林利用を推進していきたいと考えています。

協定制度への期待

都市の木造化を推進していく上での課題はコストですが、その背景にあるサプライチェーンと規制の合理化は、民間の一企業に解決できることではありません。個々の志ある企業の活動を束ね、行政からの情報発信や支援、調整によってさらに前進することを願っています。当社も引き続き協定に基づき取組を行い、木材利用促進に寄与してまいります。



地域課題に寄り添う民有林支援 国有林の知見・技術を活かして

近畿中国森林管理局滋賀森林管理署
森林技術指導官 竹内秀行

はじめに

私は令和2年度に森林総合管理士の資格を取得し、令和3年度から近畿中国森林管理局滋賀森林管理署で民有林支援担当として勤務しています。民有林行政に関する一定の経験はありましたが、国有林の立場から本格的に民有林支援に取り組むのは初めてであり、支援の進め方について多少の不安を感じていました。当局では、当時近隣の森林管理署と連携してブロック別に活動を行っており、年に4回程度民有林支援担当者による定例会議が開催されていました。会議では取組状況に関する情報交換や、支援に関するアドバイス、研修による知見の共有、技術普及を目的とした現地検討会の共同開催などが行われており、民有林支援業務における実践的な知識と技術の共有の場として機能していました。このような環境のおかげで新任担当者であった私も安心して業務に取り組むことができました。

民有林支援の取組

当局では、特定の市町に対して個別に支援を行っていたものの、広く地域全体の課題を把握する取組は十分に行われていませんでした。そこで、県や市町から聞き取りを行い、地域の課題把握に努めました。県全体の大きな課題は、県内の森林資源が成熟期を迎える中で、主伐とその後

の再造林を計画的に進めていくことにあります。しかし、近年の材価の低迷や再造林コストの高さに加え、県内の森林は急傾斜地や軟弱地盤が多く、また撤出の基盤となる林業専用道などの路網整備も不十分となっていま

す。こうした課題を一朝一夕に解決するのは難しいですが、国有林の持つ技術やスケールメリットを活かして対応を進めていきます。具体的には、県外の国有林で実施されている急傾斜地でも対応可能な架線集材

の視察研修を行ったほか、国有林で整備している林業専用道の設計技術や作業現場での研修会などを実施しました。また、再造林の低コスト化を図るため、国有林で取り組んでいる主伐再造林の一貫作業や低密度



林業専用道研修



架線集材研修(三重県)



伊吹山とICT囲いわな



小林式誘引捕獲法(くくりわな)講習会



ドローン講習会



ICT講習会(地上レーザ計測機器)

植栽、低コスト防護柵の設置技術などに関する研修会を通じて技術普及にも努めていきます。

さらに、シカによる被害も農林業にとって深刻な問題となっています。滋賀県内で最も標高が高く、貴重な植物が多く生育する米原市の伊吹山では、シカの被害により植生が失われ、土砂崩壊が発生し、麓の人家にまで土砂流出の被害が及んでいます。当署では、伊吹山への対応として、ドローンによる被害調査やICT囲いわなの貸与及び設置補助、当局職員が考案した「小林式誘引捕獲法(くくりわな)」の設置指導な

どを通じて対策を進めています。

また、市町への個別の支援も継続しています。市町の課題の一つとして、森林経営管理制度の推進など多様な業務への対応が求められる中で、マンパワー不足が挙げられます。人員が限られていることや、森林・林業の実務経験の少ない職員が多いことから、十分な対応が難しい状況となっています。そこで、国所有林の作業現場の見学会などを通じて、森林・林業に関する知識醸成を図る取組を行っています。さらに近年はICTの発展に伴い、ドローンや地上レーザ計測機器を用いた森林調査に対する

関心や要望が高まっています。こうしたニーズに応えるため、実習や体験を取り入れた講習会を実施し、活用方法についての理解を深める取組を行っています。

その他、地域の森林の施業や集約化を進める上で、大きな課題となっているのが「境界の明確化」です。地上からの調査では年間約50ha程度の進捗にとどまっていますが、近年は航空レーザ計測による森林解析技術の活用により境界の明確化を進める動きが見られます。当署においても、令和6年度から航空レーザ森林解析を実施しており、その成果を森林管理や境界明確化など



おわりに

に活用できるよう検討を進めていきます。

今後とも、森林総合管理士として研鑽を重ねながら、地域の課題に寄り添った民有林支援を行い、国所有林の知見と技術を活かして、地域の森林・林業の発展に貢献してまいります。





熊本城内の一角「緑のオアシス」、 監物台樹木園の紹介

九州森林管理局 技術普及課

3年ぶりの開園！

監物台樹木園は、特別史跡である熊本城の北側の一角に位置しており、緑化愛林思想の普及と一般市民のレクリエーションの場とすることを目的に、昭和27年に一般公開されました。約2・6haの広々とした園内には四季を通じて緑があふれ、熊本市の方々の憩いの場になっているとともに、熊本城と合わせた観光スポットのひとつにも数えられています。

令和3年からは、園内にある「監物櫓」の熊本地震被害の復旧工事のために一時休園していましたが、令和6年4月に3年ぶりに開園し、ちょうど1年が経過したところです。この記事では、監物台樹木園の見どころなどをご紹介します。

監物台樹木園ができるまで

監物台樹木園は、緑化の機運醸成やレクリエーションの場の提供を目的として、昭和27年に開園しました。現在の監物台樹木園の敷地は、戦前まで陸軍省所管でしたが、戦後、大蔵省に引き継がれ、昭和24年に

熊本営林局(当時)に管理の主体が移った後は、郷土樹種である常緑広葉樹を中心に、九州各地から樹木を集めて植栽しました。監物台という名称は、熊本城主細川家の守老を務めた「長岡監物」が熊本城の北の守



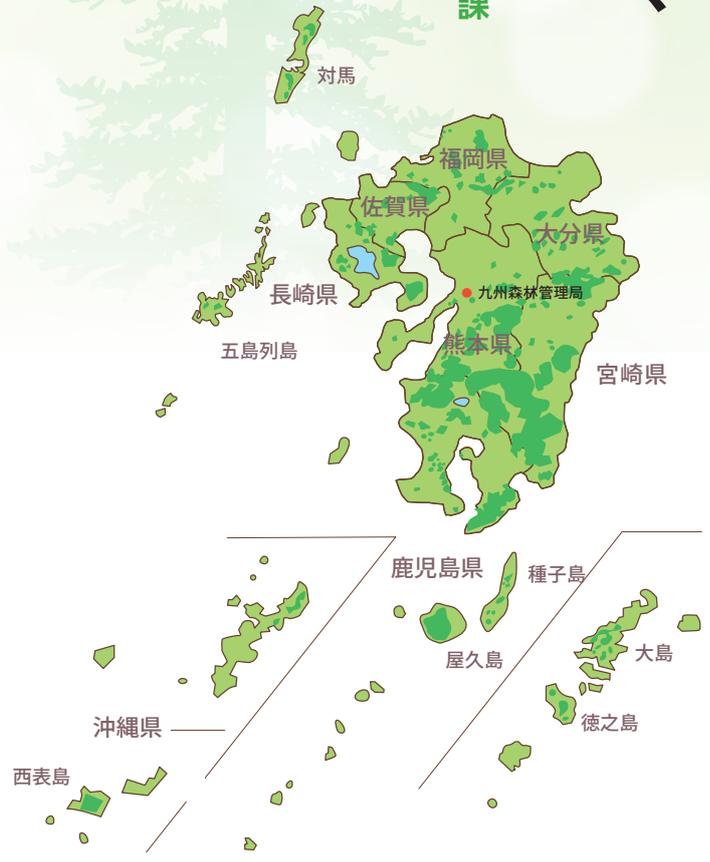
管内概要

所在地	熊本県熊本市西区京町本丁2番7号
区域面積	419万ha うち森林面積 277万ha うち国有林面積 53万ha
関係自治体	8県(福岡県、佐賀県、長崎県、熊本県、大分県、宮崎県、鹿児島県、沖縄県)

九州森林管理局は、九州・沖縄8県に所在する森林の約2割(約53万ha)に相当する国有林の管理経営を担っています。

九州の国有林は、九州中央山地から雲仙、阿蘇、九重、霧島、桜島といった火山地帯、対馬や五島列島、屋久島、奄美大島、南西諸島といった離島まで、南北約1,200kmの広範囲に分かれており、多様な森林生態系を有しています。

また、九州は温暖多雨な気候のため、スギやヒノキの生育に恵まれており、日田や小国、球磨、飫肥などの歴史的に有名な林業地が発展してきた地域でもあります。



りとして、この地を固めていたことに由来します。

見どころ

九州・沖縄の郷土樹種である常緑広葉樹を中心に、多種多様な樹木や植物が植栽されており、春はサクラやフジの花、秋はイチヨウの紅葉など、四季折々の樹木を楽しむことができます。



樹木園

また、園内のみどりの交流館には、九州の国有林に関連のある展示物や木製テーブルなどが設置されています。なかでも樹齢1000年を超える巨大屋久スギの円盤は、来館者の目を引きつけます。

ほかに、内大臣森林鉄道（熊本宮林局 矢部宮林署(当時)が設置した、総延長40kmあまりの九州屈指の森林鉄道）において、1960年代に入ってから導入された「野

村式ディーゼル機関車」が展示されています。森林鉄道の廃止と共に昭和43年12月に引返し、監物台樹木園には昭和48年頃より展示されています。

樹木園の北側に位置する「監物櫓」は、安政7年（1860年）に建築され、国指定



みどりの交流館屋久スギ



野村式ディーゼル機関車



監物櫓(熊本市により管理)

重要文化財に指定されています。細川家の時代には「長岡図書預り櫓」と呼ばれていました。敵の襲来に備えた「石落とし」や鉄砲を撃つための窓「狭間」などを有し、砦の役割を果たしていました。

緑のオアシスとして

監物台樹木園は、昭和27年の開園以降長きにわたり、熊本城内の一角「緑のオアシス」として親しまれてきました。約3年間の休園中においても、九州森林管理局では園内の草刈りや剪定作業を継続するとともに、隣接する県道への危険木や枯損木の処理など、再開園に向け準備を進めてきました。

た。

再開園の際には、「開園を待ち焦がれていたのうれしい」といった感想のほか、「こんな素敵な場所があることを知らなかった」という声もいただき、ゴールデンウィーク中は5,000名を超える来園者がありました。また、教職員の方に森林の機能などを伝えるイベント「森の塾」も開催し、学校での森林環境教育に役立ててもらおう取組も行っています。

樹木園では

今年も花の季節を迎えます。熊本にお越しの際は、ぜひ監物台樹木園を訪れていただければと思います。



樹木園入口



樹木園内



「令和6年度日本製材技術賞」 表彰式の開催

① 日本製材技術賞及び受賞者の概要

日本製材技術賞は、令和6年度に一般社団法人全国木材組合連合会が創設した表彰制度で、製材の生産向上、品質改善、地域振興等に貢献している製材工場を顕彰するものです。

初年度である今回は161工場から応募があり、生産性や独自性、品質向上の取組、雇用環境の整備等、多岐にわたる製材工場の取組内容が審査された結果、10工場が受賞者に選定されました。



受賞者集合写真

受賞者一覧

◆農林水産大臣賞

グリーンウッドタクミ協同組合(三重県)

◆一般社団法人全国木材組合連合会会長賞

株式会社トーセン(栃木県)
新丹生谷製材協同組合(徳島県)
八幡浜官材協同組合(愛媛県)
瀬戸製材株式会社(大分県)

◆林野庁長官賞

株式会社栃毛木材工業 粕尾工場(栃木県)

◆審査委員会特別賞

株式会社アイタ工業 製材工場(山形県)
ウッドリンク株式会社(富山県)
有限会社倉地製材所(岐阜県)
株式会社木原木材店(円柱材・丸棒材加工センター)(兵庫県)

このうち、農林水産大臣賞と林野庁長官賞の受賞者について、ご紹介します。

農林水産大臣賞 グリーンウッドタクミ協同組合(三重県)

スギ原木の大径化により、芯去り平角の製造及び利用が期待される中、その乾燥が難しいという課題に対して、独自に乾燥技術を確認し、スギ平角の品質向上を実現。

林野庁長官賞 株式会社栃毛木材工業 粕尾工場(栃木県)

素材生産事業者が原木を直材と小曲材に仕分けせずとも価格差なく受け入れる仕組みを構築して、曲がり材からも柱材等を製造。



農林水産大臣賞を受賞した
グリーンウッドタクミ協同組合(三重県)

② 表彰式の開催

「令和6年度日本製材技術賞」の表彰式は、令和7年3月13日(木)、木材会館(東京都江東区新木場)7階大ホールにおいて開催されました。

農林水産大臣賞を受賞したグリーンウッドタクミ協同組合の浦田代表理事からは、「我々のような中規模の製材工場の受賞が、他の中小工場の励みになることを期待するとともに、今後も木材の普及に取り組んでまいります」との謝辞が述べられました。



「ミス日本みどりの大使」とは

公益社団法人国土緑化推進機構Webサイト「みどりの大使」
(<https://www.green.or.jp/promotion/midorino-taishi/entry-1679.html>)

みどりの大使が行く!



2025
ミス日本
みどりの大使
佐塚 ころこ

こんにちは!

2025ミス日本みどりの大使の佐塚ころこです。先日、山梨県緑化推進機構にご協力いただいて山梨県の林業を視察しました。今回の視察の目的は林業の川上から川下まで一連の流れを意識して見学することで、林業の過程や工夫を知ることです。

想像以上に大変な苗木生産

視察した施設は4箇所、まずは苗木生産に力を入れている有限会社明見緑化様に伺いました。ここでは、植栽の前の段階である苗作りの大切さと大変さを学びました。種から苗木まで育てるには2年ほどかかり、やっと立派に成長した苗木でも一本たったの200円ほどにしかならない事が衝撃でした。さらに、種を植えても最終的に出荷できるのは80%程度で、天候の変動



にも大きく左右されるそうです。また、新たな手法に挑戦される際には苦戦することのお話も聞きました。初めてコンテナ苗の生育に挑戦された際は、最終的に出荷できた苗は種時きをしたうちの20%程度だったそうです。それでも2年間かけて育てた苗が出荷される時は満足感とやりがいを感じたとお話しされていて印象的でした。

最先端技術を導入したスマート林業

次に、地域材利用をはじめとするスマート林業に力を入れている有限会社天女山様に伺いました。スマート林業とは、ICTや最先端の機械を活用することで労力を削減して林業経営の安定化等を図る林業です。スマート林業の一環としてドローンを使った森林調査があり、実際に私も操縦をさせていただきました。ドローンを上空にあげ、レーザーで一気に周辺の木の高さや数まで細かく測量できることに驚きました。それまで必要だった体力や専門的な作業が必要なく、作業時間も80分の1で済



み、結果的に10分の1の人員費で測量ができるそうです。代々受け継がれる林業の良さを残しながら先進的な技術を取り入れてどんどん新しいことに挑戦し、時代に合わせ変革していく勇氣が新たな林業の時代をつくっていくのだと感じました。

伐採から加工までを手掛ける森林組合

3箇所目は南部町森林組合に伺いました。南部町森林組合は森林整備課、販売課、生産課と3つの組織に分かれており、それぞれが協力し合って組合として活動しています。特に印象的だったのは木の太さによって価値が変わることです。柱にしようとする必要が高い16〜18cmの木は価値が高く、逆に大きすぎたり



小さすぎたり形が歪んだりして使い道が限られてしまう丸太は価値が低くなるという事が衝撃でした。

丸太を身近なものに加工する工場

最後は地域材を利用して構造用合板を作っているキートック山梨工場に伺いました。お話の中で、私が現在通っている国際基督教大学の体育館には、この工場で作られたカラマツLVLが使われていると知り驚きました。丸太から合板になると一つの工場で行われている所が印象的でした。丸太が桂剥きにされ一瞬で薄い板になる工程は、思わず目を奪われました。この工程でどうしても出てきてしまう端材も、チップなどに有効活用しているという点に感銘を受けました。



4箇所施設を見学させていただき、林業の流れが理解できました。これからもたくさん森林と関わり合いながらさらに理解を深めていきたいです!



木林^{もり}林^{もり}を^い活^いか^すす



木林^{もり}林^{もり}を^{まも}り^る



原画：西尾 健成さん
国土緑化運動・育樹運動ポスター原画コンクール
入賞作品
「見て!! 僕の宝物」

緑の募金

ご協力をお願いします

「緑の募金」は、身近な地域の森づくりをはじめ、国内外の森づくりや人づくりなどに大切に活用されています。



緑の募金

ご協力をお願いします

春の新緑シーズン(1月~5月)と秋の紅葉シーズン(9月~10月)の年2回
家庭募金、街頭募金、職場募金、企業募金、学校募金などによって行われています。

緑の募金に関するお問い合わせはこちらまで

公益社団法人 国土緑化推進機構 0120-110-381
電子メールアドレス bokin@green.or.jp

